

あるご利用者さんとのサービス担当者会議での話である。

ご本人は小規模多機能にいらっしゃる前に従来の在宅サービスをお使いになっていた。状態は典型的なアルツハイマー型認知症中～重度。ご本人は日中独居であり、ご家族としては目が離せない。

従って、群馬県から妹さんが10日間。北海道から娘さんが10日間。残りを毎月自費も含めたショートステイで賄っていた。ショートステイの準備等は自費の訪問サービス。介護タクシーも使う。担当ケアマネジャーも、ショートステイの手配には苦勞されたことだろうと思う。

ショートステイ先では、他のご利用者さんと結託して、『外に出て帰りましょうよ』というショートステイ側からしたらクーデターの張本人。リーダー格。チェ・ゲバラである。ショートステイではいわゆる『困難ケース』として扱われ、投棄を余儀なくされたばあさんである。

このばあさんはこんな風に思っただろう。『ああ、帰りたいわ。』『ここにいる意味が分からないから帰りたいわ。』

ご本人は何故、結託して集団で帰ろうと思ったのだろうか？『「帰りたい」という私の希望はこの人に言っても、聞き入れてもらえないわ。私だけの希望では駄目なら民主的に数の力で主張するしかないわ。』

非常にたくましい、運動家である。そして、彼女の意見に賛同者が集まる。その数、5～6人。

当然、施設側はご説明しているはずである。『家にご家族がいらっしゃらなく、お1人でご生活されるには大変だから、こちらにお泊りせざるを得ない状況のようです。本当はお一人でお過ごしになれるとお考えでしょうが、ご家族が深く心配されるので、こちらにお泊りされるわけにはいきませんか？ご家族がお帰りになるまで一週間あります。お辛いと思います。でも、一緒にいてくれませんか？』

ひょっとしてこんな説明してないよな？『今日はここに泊まって明日帰りましょう。(本当は一週間後に帰るんだが…)』

ご本人が数の理論で訴えるとは相当のことである。施設に1人で訴えてもそれが伝わらないことを覚えているのだから、対応がひどかったのだらうと思わざるを得ない。

つまり、認知症の人を『分からない人』とって適当に説明したのでらう。どっこい、ご本人はきちんと、1人の力では無理だということを理解している。こんなに記憶力のある認知症の方なら、きちんとご説明すればお分かりになるのは想像に難くない。

この事例で僕が気にしてしまうことは、認知症の方だけでなく、記憶障害がない別の方も、『ここには居たくない』と思うのではないだろうか？ということである。ただ、記憶障害がないから、『泊まらないと家族に申し訳ない。迷惑をかけているから』とか、『自分が家に帰っても、1人で出来るわけではないから、ここで手を借りながら生活するしかない。』という、日本人の慎ましやかな美学があるのではないだろうか？みんな我慢しているのである。『家に帰りたい』と。

ショートステイの職員さんは非常に大変だと思う。ご本人が本当に望む、『家に帰りたい』という希望を聞けず、『はぐらかして』『話をそらして』対応する。大抵、施設から研修に来る方たちの認知症対応は、『はぐらかし』『ごまかし』『そらす』のだ。そして、『話をどの方向に持っていけばいいですか？』と質問される。

さあ、歌を歌いましょう！ってなるわけだな。レクリエーションという名の逃げ場に。

僕は、その言葉を聴くと『えげつない』と感じる。

その対応は、認知症以外の人にも、横行していることだろう。その人が望む『真のニーズ』を捉えることも出来ず、ただ、自分をごまかしながら仕事することになる。そりゃあ、燃え尽きまずぜ。真っ白な灰に…。

僕はお金を頂いてする仕事には必ず、『説明責任』が付きまとうと思っている。説明できない仕事はお金になってはいけな。認知症の人は記憶障害があるために、失った短期記憶を使って考えることが出来ないときがある。従って、ご説明しても、忘れてしまうことがある。半身麻痺の人の立位に必要な、左足の変わりに壁役になる介護は理解できるのに、失ったご本人の記憶を介護者の脳の中にストックして支援することは考え付かない。介護は杖であるなら、脳みその杖になる対応をすればいい。

僕が認知症になって、考えるのが難しいなら、一緒に考えればいい。どうやったら帰れるのか、きちんと一緒に考えて、可能な限り力になってほしい。そうすれば、反体制にならない。だって、自分の味方ですから。

日常的に使っていない薬を盛って非日常に閉じ込める。そりゃあ、誰だって、反抗したくなるわな。『理由なき反抗！？』そうではない。人が行動するに、僕も、あなたも、認知症でない要介護者も、認知症の人も、みんなに確かな理由がある。

介護職の人たち。『説明責任』を果たすことができますか？行動の理由は『(利用者本位という)理にかなった』モノですか？